松平

二百十一冊ノ内

内閣文庫	
和書	類
三六〇八八	號
二一一	冊
一五六	函
一〇	架

395

内閣文庫		
番號	和	36088
冊數	211	(123)
函號	156	17

記録御用所

高三百俵

家紋　蔓ノ丸　水ノ円沢ノ字

松平　源姓

廣忠　右衛門初名

忠政　右京大夫　勤六

延宝年中春名廣成と改ム　延宝

廣忠　右衛門　水野右馬大夫忠政の長女入輿のこ、

此ノ節来ニ付水野家嫡より松平ニ改ル

39

忠の太刀を以て御佩刀ニ被成候而爲

の身ニて候之難申母へ御内談

而廣忠様懸御目候と申候ヘハ以而可申被遣

まじと而御對面被成入興ナ

其後ハ村岩津とて前へ参候出来り

極り候

廣忠卿後ニ亭へ御父おもひ時武田石衣

母乃粟田小たまり八母死後忠政殿

し御中絶の後以而粟ケ崎

乃細御新と云ハ此忠政送状ニ有之○

粟ケ崎村小ちゝ忠政殿腹の大夫人出

せらるし萬

東照宮御誕生自此年御母子御一年

村ニお家をとらさる榎新（キッツ 梯見）とに於て○

天文十八年三月六日

廣忠卿逝去小竹母離縁して姉林へ

ありしか粟ケ崎村に居住被為成

東照宮今川方へ被預御父の後渡井

雅楽頭正親卒す其村忠役の母子ハ在
少有り上正親居城役の後正親へ加
勢して後永禄八年
東照宮西三郎へ御働ハ時ニ忠役の事
へ御直書被下置御吟味の上ニ感有
て
広忠君御位牌へ御拝進申上右故御菩
提ニ為なさるへし其君一宇建立仕度旨
願ひし處則御建立被仰付候ニ付揚誉山

広忠寺と寺号たまハり撤新たにして
開山ニ被仰付し剣恵最和尚と改名曹
洞宗にして又権貴文の御墨下したまひ
広忠君御位牌の数下に忠役の縁の事御
自筆にてなし下されし御直判被下置
広忠寺は寺し任也依仰付ける支配
寺なれ候へ出陳○
東照宮へさる正之剣額田郡ともまて此辰
叙舜して本宗大変に改進く常々の

関ヶ原御合戦谷城地ニ而首御付候○
領地居住し御擁護出候處追而御送之御
構候ニ付候ニ而御座候御用向之御
着し候ニ付御甲冑鎧の御拝領被下御
自身御拝領候節御太刀かと也之
御目録ニ而進上仕候ニ付御拝領
之由ニ而首上意有之候ニ付相成忠政上
候ハ右様の御甲冑御甲ニ而御座候御預け
申上候以来之通り子孫まで一生の宝と可任

申上候処右之通り書付ニ而御座候首
上意有之候四日相成御付候旨被仰付
下し置かれ候段添へ文御頂戴仕候
其後又御自筆の首忠政返状ニ有之候而
持之御紙面の九紋所ニ押形相成子孫迄
押形の通り御付被下候処ニ御紋有之
同様之段の字御下の文字有り候間
其太切之右之事ニ付忠政成之候而も
少々右武具之類に随相應の段の首尾候

廣忠君ハ忠政出生の時七歳目より御代々
傳はり御召よし安綱の御刀并光の御脇差
被廣の御召服さし下されし事後も有り
仕り相伝付事天笠の阿陀羅仏経伽羅
釼多伽之掛縁大黒天之木像一躰并以
忠政母君於大ノ方へ被進し時
廣忠君御仏前為置御護摩と仰られ候
忠政の母の秘蔵一巻母ハ与政ニ授け後
東ケ谷村にて山ノ老人の代母ちうひし

露大切の事ニ而小ニ而も動く忠政ハ譲り被
仰付られ別ニ忠政ハ相伝せし事も忠政の思
召ニ而東照宮ニ被進候處焼捨し由申伝
且又忠政の母へ茶釜一ツ下され當時ニ
於別ニ廣忠君へ納じ
右祖父の形見なり絶の〇何も扨置不
不思一ノ谷御甲冑御自筆を今ニ所持
其後病年ニ付東ケ谷村ニ引籠其身も
四年正月十三日卒九十歳ニ而死亡別法

龍光寺之義

欟新（キヤツシン）　翠巓（スイテン）　後恵最大和尚

東照宮御誕生日之年月日時尤ニ書付

廣忠君名をつけて傳へ成之列　廣忠

寺開山

康久

康久　　勘六　後　孫之助

元亀元年　○

東照宮へ召出され

孫之助君御元服當時御名御諱を進し

付候之所々元服ニ仕合御名付之通り有之候

御一字下され孫之助康久と改　備前守次

乃御奉行相勤知行永楽百五拾貫

文の地とをもって

孫之助君御小姓○天正七年九月十五日御

逝去後桑子村へ引篭相勤知行以前の

ことし○同八年四月

東照宮様御代田中へ御鷹之節酒井河内守
重忠ハ不如様御付候ニ而右ハ父右京大夫
忠政先届候而御付候而旨石川伯耆
守より御届有之候後御沙汰ニ而
河内守子ハ於出〇〇日十八年ニ河内守武蔵
河越の城被成付康久ても在城客ニて
在之其後右京亮下り二被仰下候相續の
儀中達として酒井家を辞申候して
右河内守家督ハ次男七歳長清へ譲り康久ハ

其後酒井家よりも被成御扶持候を辞して

長清　右京進　七歳

次男として父家督を継ひ十一歳ニ而
東照宮へ被出直ニ成長の後小田原御陣の
前五万石の勢と称し御合戦の節比類
く働きを以ても八ケ所の深手を負比類な
らぬ之為幸手村へ引籠所領地ハ没ニ
して寛永五年三月六日死三列広忠寺

小葬

安定　七歳

慶長五年

東照宮へめし出され御近習而勤父所知

収公せしめられて弐百石扶持をたまふ○

大坂両御陣供奉大坂御平均之後本

地不残かへし下され合右衛門書付拾

御判物下し置る上総国米ケ谷村へ於加へ下

元和二年喜多渡殿へ右衛門書付拾米

せしむる

東照宮御不例在府ニ候得ハ及ひて某ケ谷村

ニ隠居○寛永十年六月弐百弐拾石加

恩あり都合四百七拾石となる○同

十五年二月致仕○同十八年九月十七日死

同寺ニ而葬

政晴　始貞長　次郎右衛門　実父未詳　法名　識心

慶長十九年御登城の節ニ列ニ而中小
とひく

東照宮へ八歳ニ而御目見〇元和八年七月
三日大御番〇寛永二年弐百俵〇同十
八年三月八日家督〇御小性組〇正保
二〇亀松君御守御附人と被仰付
十金壱役〇同四年八月四日御逝去ニ
付大御番〇慶安二年六月十一日同組ニ而
加増二百俵合六百七拾石〇万治（寛文）三年

二月廿五日御納戸頭（同年十二月廿八日布衣）〇延宝元〇二月
廿一日病死〇同二年十二月三日隠居弐
百俵寄老の料下されて〇元禄七〇
年六月廿八日死八十八歳江戸牛込寺町
保善寺ニ葬

改重

長大夫　求馬　（日記十　第六年）

万治二年七月廿日大御番〇寛文元年
十二月廿七日弐百俵下されて〇延宝二年

十二月廿二日家督○元禄十一年七月父知行
之内弐百俵地方ニ直し下之○同
十三年正月六日病死○宝永二年八月十
八日死同寺ニ葬ル

利晴　　七蔵
寛文七年十二月廿一日新組御書院番三百俵
其後二代目七蔵東尾張仁右衛門一件ニ付
享保二十年十二月廿七日家断絶

忠明　　喜太夫　十太夫
実ハ政晴六男
貞享三年十二月廿日養子○元禄六年
十二月九日大御番○同七年正月晦日弐百
俵○宝永三年七月廿七日家督○享保
二十年従弟実ハ利晴東尾張仁右衛門一件
十二月廿七日遠慮仰付られ候時忠明利晴
両人共不調法ニ付同日評定所ニ而

て取来候六百七拾石百石上ヶられ残ハ下
しおかれ自分隠居して元文二年巳四月六日
死七十巳泰円寺に葬

政央

彦太夫　猶蔵

父かもとに隠居せし時延享二○九月廿
二日新知百石下されし三河ニ来久補仕者
頼は家督継付弐百俵に二返小普請○
同三年六月十五日一統初見○宝暦八
年十二月六日死四十九歳泰円寺に葬

忠之

彦太夫　内蔵助　後隆

実ハ諏訪田長九兵衛順将次男
宝暦八年十二月廿七日兄要長子家督
小普請入○明和二年十二月廿一日初見

清和源氏

松平支流

今の呈譜およひ酒井雅楽頭忠道か奉ル
の附属家記に松平孫三郎久典か譜に三河法藏寺
廣忠寺の紀録等によるに元祖勘六忠政ハ
廣忠卿の御子なり初右京進右京亮といふ始
めハ大給なる松平和泉守か家正（或ハ左近忠法藏寺の紀ニハ源次郎好加賀守か家元といふ）
か女　廣忠卿召仕の人忠政をまうく　廣忠卿

水野氏を娶らるゝにおよひ忠政母子三河国
桑谷村にうつり住しか八二百五十石の地を領ひ
于時忠政の母また男子を産みしに
東照宮の御誕生と日を同しうしけれ八廣忠卿
相初しめ給ふありかく備と云ふ號を擬新と名付
らるゝ廣忠卿逝去の後忠政等か母尼となりて
妙琳といふ永禄四年酒井雅楽頭正親西尾城を
攻る時忠政

東照宮の仰によりて正親に属し同五年二月
東照宮桑谷村の郷にいらせたまひ忠政母子
三人凌ぎて奉りしに家にあつかれし廣忠卿
の遺言脚を拝しおひ妙琳か僧清にせられ書
の地に一宇を建て御院号と御諱字をと
らせく瑞雲山廣忠寺と号し則擬新を住持
とありさまに名を慈恵最とたまひ又六年
十二月十八日五十貫文の地を寄附せらるゝ

よし清眞卿をたまはり　廣忠公の墓碑の
銘に其の由へよしをしるさせたまふ忠政は
墓傍に参詣して領国郡の内にて寺地を
賜ひ従五位下右京亮に叙任せられける時
織田右府より参られし一の名と名付し
清兜を給りて志るしとて来由をいひ清らう
御かはし清重葵の紋の押形をも賜りて永く
家紋とし副紋に此合印の故文字銭

用ふ庵しその作あるはし頃忠政まうし
時に廣忠公の錦の守袋に鴻田義助の短
刀を持入られたまひ七夜もと具足かひに
安行の刀長光の脇指杖廣の吉銀色天笠笠
其因陀羅が画きし釈迦羅副多伽の掛幅
大黒天の像をあまた編ひ珊瑚にて以て
うへ御持ありひし秘書と茶壺をたまはる
忠政慶長四年四月十三日死せし法名宗賢

三河國山中村の法蔵寺に葬る忠政二人子
あり長を孫三郎康久初勘六勝正といひ次を右京進
初七郎長清といふ元亀二年八月廿八日岩津三郎
信康君の首服を加へたまひしとき康久と
東照宮の御前にめしゝて元服し孫三郎康久に字
一字を給ひ備前雲次の御刀を賜ひ百五十貫文の采
地をあたへらる後しはらく信康君に附属せしめらる
信康君逝去の後天正八年五月朔日

東照宮駿河國田中にうつらせたまひし時
又召されて酒井河内守重忠に属し
其後子孫相續て彼家の陪臣となる
長清は則此家の祖なりといふ志かるに寛
永系圖をはしめ友府の記録をたつぬる
に廣忠卿の御子にて政忠最と書傳しを
あくまて母好林の妻大給の松平和泉守家乗
の系圖にのせたる所なし廣忠寺に葬る

給ひし五十貫文の地を寄附の状いつの比
よりかうせたりといひ、今も傳へ侍る政資か
家に也兜とともに給ひし親筆と傳ふるものは
しらく彼の余存をもて親手といふものは右政
か施もしとこ絶めおく
東照宮のなをさ進らせ編つゝけしとの事は何れの比にや
家人の中叙爵せしは天正十四年をはしめて
其とす其後忠政よりも先に叙爵せしもあら

かくし紋の押形なといふものゝ今に存し
や覚来あるを後にはあやまりて伝しかつきに似たる
寛永元年同今の長沢の松平大蔵少輔信綱が
先祖の世系を知りかきし下に孫三郎某を
祖とし其子を右京長次とし其の右京長次
其今の譜の右京進長清と相似て後とも
又の名をも同しうして信綱が此系譜を書る
譜に其の祖孫三郎信重が二男右京長次は子

孫を詳にせすといふ是寛永譜にのせたるか
孫三郎其子右京長次と名同しきうふらく
ハ吉田家長清の支流にして其祖ハ孫三郎信定
二男右京長次同人なるへきにや後嗣なけれは
右京進忠政を祖とせしより後漸く家系
をまし継つゝく子孫相違なしといへるなるへし
文義某文右衛門京（享）保のころ一代ハ勘定家
り其子義某文政頃慈済のことあらはし時

其源流を二郎右衛門忠暁にもとめ洗ひ
しより忠政以来の譜牒を知らるへきなり
しるに忠政のしわくめにおほくハ志るしき
東照宮の御連枝たる於なる源氏にゆかりある
紀なきいふハ久松の俊勝か子ハ某父兄弟
家数代は友其他に異なれとも名若干の所
知を給ハりまして御はかりなるを継き
とり知るものゝなく微々たりしをいつしか来

許不審なることあるに仍て寛永京圖長澤の
末孫のよし孫三郎某ニ子か京長次ニ至
則此の祖たる人にして再ひ大暁ニ作らさ
猶ニ大暁の家ニ書傳絶しとの失亡し
たゝ父祖より以ひ傳へさし此よし緒ニよりて京
図を作り出て大改の由備を新に証とすへき
ものなしと言へるにけり是ぞ家に傳ふる
不分明なる傳なるゆへ此内事ニよりて正

恩免人の御法ニハ及ひ難きよし作らさる
しかるニよりて是様ハゆるく家説ハ用ひか
たしといへとも精く古様を知るへく候
勤ニて家へ譜傳ハ専寛永京圖ニ考へさふ
久興か家説のごとく長清（寛永京図ノ長次）か足なるへきと
是とも已ニ寛永京圖の載さる処なれハ
今古様を京ニかけ仍
某　孫三郎

東照宮より旗の人たてまつる

長次 大原

東照宮より旗の人華分

長吉 七歳

今の繁より長定

慶長五年関原御陣の時まで

東照宮より旗の人華分大坂を蒔葉右村み

同知二百五十石と[illegible]云

○

東照宮御代入

松平 高弐百俵

源姓

家紋 丸内鳶 九曜之星 丸之内相

松平兼人信孝惣領

九郎右衛門

守忠

文信孝死後両作依の上遺[illegible]月

[illegible]

東照宮へ召出され大御番二千石○慶長
八年隠居○同十年十二月二日死
天正十八年大番入

忠清　與十郎
慶長八年家督○同十年十二月廿二日
死家絶

忠利　九郎右衛門
東照宮へ御目見計の四百石其後
台徳院殿附関ヶ原御陣供奉○慶長
十二年より依而御城御番二年勤○
同十九年改易○大坂御陣の節浪人
ニ而井伊掃部頭殿に附て進退（出
落城後
大猷院殿へ召出され二百俵○慶安二
年正月十一日死江戸白金養春
寺に葬

忠貞　九郎右衛門
厳有院殿御代大御番○万治二年十二月
廿三日同組跡目○十二月廿八日加増弐
百俵○寛文九年五月廿九日病死○延
宝八年三月廿八日死同寺ニ葬

忠政　小兵衛
寛文元年十二月初見○同七年十二月三
日新規大御番○同九年十二月御
切米弐百俵○元禄二年十二月八日病死
○同九年八月廿八日死同寺ニ葬

忠矩　源之丞
元禄九年定十二月九日家督○享保九
年十月九日大御番○同十七年二月八日
元方御納戸○寛保元年三月辞御番○
宝暦二年十二月六日死同寺ニ葬

国立公文書館
National Archives of Japan

忠昆　〻市郎　六之助　万之助

宝暦二年六月七日家督○同年九月
十日大御番○同六年○六月廿七日掃方
御納戸○同九年三月廿九日新御番○
明和六年八月廿六日死四十五歳某門寺
アイ継父

忠寿　〻市郎　小三郎　徳次郎　孫九郎

實松余所右衛門二男

明和六年十一月廿日家督○天明八○
十二月廿五日大御番○寛政四年二月十六日
依病辞之同十年十二月十六日死四十五歳

○

厳有院殿御代

松平　高二百俵

源姓　家紋丸之内政之字

松平彦太夫政勝次男

政真　彦十郎

寛文七年十二月廿七日新規御小性組二百

俵○貞享五年七月廿七日桐之間番入

○同年十月廿二日小納戸○同年○十二月廿日
廣敷○元禄二年十二月廿六日小性組
○正徳二年四月廿三日死 牛込保善寺
ニ葬

政辰　平十郎

實 加藤平内泰宣男
正徳二年七月廿二日為政存養子親類
請○享保九年八月十二日甲府勤番○

政保　左膳　政之助

同年九月廿八日御目見○元文五年
十月廿七日死 甲府板垣村能成寺ニ葬

政親　平十郎　政太郎

元文五年十一月廿七日家督勤番○延享元
年三月朔日於甲府御目見○寛延元年
十二月十八日死 甲府大泉寺ニ葬

宝暦九年三月四日寄合小普請○明
和七年三月廿八日勤番○安永四年正月
七日松平周防守組母衣宅へ先番小石
川御普請石宅番而ゟ出火ニ付同年三月
廿八日差扣三月廿八日御免○寛政二年
七月廿日西丸御書院番勤番

浚明院殿御代

松平　高三百俵

源姓

家紋　丸之内改之文字
　　　丸之内蔦之附遠

松平為三郎改勝次男

改房

次郎右衛門

寛文三年十一月十九日新規御小性組之面
俵○元禄九年七月廿九日御小納戸並○同
寛保四年御小納戸頭取之紀

十年七月十六日二丸御留守居○病免小普請○正徳元年八月廿二日死牛込保善寺ニ葬

政定　杢之助

実　同姓織部政定也七男

元禄十二年十二月八日聟養子○同十四年初見○正徳元年十一月廿七日家督小普請○同二年三月廿六日御書院番○享保二年十一月十日病免○同十六年三月廿六日御書院番○元文二年十二月十八日死年八歳同寺ニ葬

忠暁　二郎右衛門　之橋　後住　岩峯

正徳二年十月十六日初見○元文二年二月廿七日家督○同六年正月廿七日御小性組○宝暦九年十二月十六日上勤廃令之寂○明和二年六月晦日病

免○同四年八月四日致仕○同六年正月廿六日死七十八歳同寺へ葬

忠儀（忠記）　二郎八

明和四年八月四日家督小普請○同十年三月廿九日死二十六歳同寺へ葬

政春　木工

天明元年十二月八日家督小普請○

寛政元年八月十日死二十七歳同寺へ葬

政備（始政行）　万之助

（実忠儀二男）

寛政元年十二月八日（十六歳）家督小普請

台徳院殿御代

松平　高五百石

源姓　家紋 鬼蔦 丸ニ蔦

清康君御舎弟

藏人

信孝

廣忠君御後見〇天文十七年

口
廣忠君幼少ニ於安城
信忠年中同時之對手ニ而
預ケ置候所
廣忠君所之後見ニ
駿府ニ御座ニ付信
孝其外同心之…
湯治ニ…右之為
廣忠君同時…
…信孝湯治ヨリ
…御後見

四月十五日飛二而　菩提河原ニ而
葬地　常陸国和田浄珠院

九郎右衛門

重忠

東照宮ニ者始○天正十八年大田喜部○
慶長五年致仕○同十二年十二
月二日死　葬地不知

東照宮御木像　今ニ所持
右尊像重忠彫刻仕置候処
東照宮達御聞ニ致進上　上覧ニ
上意有之　上覧之上難有　上
意之有之旦　御代田界後右
尊像ニ而可拝旨　上意之有之
嫡子利綱後ニ為忠利ニ譲○
于今所持

尊像ヲ庵中ニ移成ルニ依菩提所
目白養國寺ニ預置
東照宮御直筆ノ祿坊主指物拝領
今ニ所持

忠清
千之助
慶長五年　名替　直子大作書記○

同三年十二月廿六日死　二十七才
子無之断絶

忠利
九郎右衛門
台徳院殿御代ゟ知五百石○
台徳院殿御側ニ奉仕○慶長十
二年伏見御城番三年相勤駿府
○同十四年十月十一日在番中

不調法之處有之ニ付改易○大坂
御陣之節娘人ニ而井伊掃部頭手ニ
附玉造口ニ而子共ニ而搦取ニ及ル
召出三百俵○慶安二年正月
十五日死 葬目白養國寺 二十八歳

忠貞　九郎右衛門

嚴有院殿御代大御番○萬治三年
二月廿三日組頭○同年十二月
廿五日加増弐百俵○寛文四年五
月廿五日病死 善清○延寶
八年三月廿八日死 葬同寺

忠義　平十郎　煙成

寛文三年十一月十九日家督○
元禄二年十月廿三日桐之間番○
同年十二月十二日小納戸○同
三年十一月十二日桐之間番
○同七年四月十二日大番○
同十年三月廿八日病免○
同十二年七月四日小普請米地方ニ
直ル五百石○同十五年
十二月十八日致仕○享保元年
七月廿五日死葬同寺

九郎右衛門　室心

忠政
實者深津五郎大夫正武四男
元禄九年十二月二日相続
○同十年八月廿八日初見○同

十五年十二月十八日家督○同十七年四月十日大御番○享保十五年二月十八日老人褒金弐枚○同年十二月三日致仕○寛保元年十一月廿七日死八十一歳同寺

忠高

九郎右衛門

享保四年五月十五日初見○同十五年十二月三日家督○同十七年五月四日大御番○寶暦十年五月十九日（五）死五十八歳葬同寺

忠明

与十郎

隅次郎

寶暦十年八月二日家督○同
年十二月廿五日初見○同十一年
十二月十九日大御番○安永二年
九月四日於大坂在番死四十八歳
葬大坂壽光寺

忠方

幸十郎　言十郎

同四年九月廿八日陞上
園部名揚○同十二年
三月廿一日叱責免的
此後陞

安永九年十二月七日家督○同
年十二月廿二日初見○天明二年
三月十四日大御番○同八年七月
十三日京都在番中病死葬　三十八歳
同所三寶寺

忠敦

九郎右衛門　喜四郎　安房守

實者忠明四男
天明八年十月四日生事多寿○
同年十二月廿三日初見○寛政
五年五月四日中務大輔○同年
七月五日中務大輔○同年十二月
十八日布衣○寛政同七年三月五日
小金ヶ原○同年八月晦日中小
性○同八年十月九日上千葉
節　御歳先供弓馬射留同十二日
时服三○同九年十二月十八日叙
爵

東照宮

松平
源姓
高四百石
家紋 蔦ノ丸ノ内葵
蔦丸内五三桐

松平三河守親氏五代 松平隼人佐親長二男 松平次郎左衛門重忠
長子 松平次郎大夫正成 嫡男

信貞 佐内
次郎左衛門

松平太郎左衛門尚栄方ニテ出生〇
慶長十八年
東照宮於駿府拝　召出初見参
下之意御小姓四百石〇大御番〇万
治元年十二月廿五日卒葬牛込
光照寺

次郎左衛門　兵助
信重
元和二年十二月廿六日生
年月不知家督〇慶安三年
十二月大御番〇明暦元年十月
小普請入〇寛文十一年十二月
廿三日小普請組〇減少三年山役
免〇元禄十年五月武州
埼玉郡箱田村上野村所用二年

四百石不足　寛文〇同年七月下
総国豊田郡曲田村并内村所領
谷村ニテ込高ニ改　五百石弐斗九升
七合九勺七才〇同十四年十二月
致仕〇同十二年三月十日死
七十歳　葬　同寺

信久　次郎右衛門〇　甚兵衛
元禄十四年十二月家督〇
享保三年九月廿五日死五十年
四谷　葬　同寺

信盈　兵助

享保三年十一月五日家督○
寛延二年四月廿日死　四十三歳
葬同寺

親房（信村改）
次郎左衛門　伊織
實者杉原大郎左衛門親貞八男
年月不知養子○寛延二年
四月九日家督○同四年三月
十九日初見○明和九年八月
十六日大番○安永四年閏
十二月八日病免寄合○同八
年十二月三日致仕○天明二
五月廿六日死　七十八歳　葬
同寺

信賢　喜三郎

安永二年二月十五日初見○同八年十二月三日分附○寛
政元年十二月五日死葬
同年齢四十歳

信民　弥左衛門　久五郎

實者竹内孝平次正相ノ男
養子○寛政元年十二月廿日
分附○

大猷院殿御代

松平 二万五百石

源姓 家紋丸ノ内梅鉢葉 / 丸ノ内打毬

備前守直亮信恵二男松平十郎

三郎康孝事松平六大夫

改重恕候

甚大夫 庄大夫

守勝

寛永八年十月十八日御座敷より
大番二罷成御様子勤仕同
十年六月六日新知弐百石下さる
○慶安元年十二月加恩
常憲院殿御抱守○慶安二年
閏八月加秩二百俵御小性組番入
病○万治元年病免○寛文七年十
二月十六日神田御殿より被仕○元
禄二年十一月十二日死七拾七歳
牛込法正寺に葬る

重政

作之助

寛文六年十一月十六日神田御殿より
召出され弐百俵下され御伝役
小性○延宝四年九月十六日同
所御書院番○同七年十二月

十八日家督○同年十一月七日両丸
小性組○元和二年十月廿一日御続
番○元和七年同九月九日小性
組○同十一年七月二日廿九年父よ
御ゆるし加秩三百俵を給地とあ
しく重政増○同十四年八月
廿二日病之○正保二年十二月十日
死同寺に葬

政武　源七郎

初字友

正保二年五月晦日家督小普
請○同年七月十一日初見○寛保
四年十月十八日小性組○同十二年
五月八日死于江戸松泉同寺に葬

政房

伊兵衛 初新助

享保十二年八月二日養子家督 實ハ政二男
小普請○同年十二月十二日初見
○同二十年十二月廿二日西丸書
院番○元文六年九月廿六日死六
拾某同寺ニ葬

政徳

鉄太郎 庄右衛門

初政久
實政武次男

養子 詳紹○元文六年十二月二日家
督小普請○同年十二月十一日初見
○寛保二年九月八日西丸小性組○天
明六年十二月廿一日老免今盛救務

領○寛政六年九月十八日死七拾
八歳同寺ニ葬

政貞　初政登　六兵衛　母右

安永六年七月十日御書院番
○寛政六年十一月八日家督○
○安永十年二月十四日御射ニ被

五番之組頭ニ被仰付○同年九月
晦日以上關白屋敷御番頭ニ被仰付○ニ被仰候
草鞋二被ト被仰付五番之組頭ニ家督○天明
二年九月廿七日御先手組与力被仰付御
十月八日御勘定組頭○同二年十月
晦日以上大御番ト被仰付被仰付諸式御
○同二年十二月二日御射ニ被仰付同日
今度御役ニ被仰付○同四年
九月十七日野馬組○寛政七年

二月五日出火合東派精出可勤事

唐君表御代

松平 源姓 高田信

家紋 九ツ目結花菱 抱角引両 葛ニ葉

徳川左京亮信忠三男 松平十郎二郎

康孝庶子

清長 越後

父康孝死後嗣子なく遺跡ハ兄弟之
信孝押領す清長ハ三州松平村農

家にて出生其の後同国額田郡上の里
民間ニ有之しを
廣忠君時ゟ石川ニ被預る付石出る
○死

清禄
改利
左近

廣忠君ニ奉仕

清政
改清
豊太郎
右近

東照宮御代ニ別ニ関東え采地を給
上ゟ初ゟ不○鳥居彦右衛門元忠御先鋒
命せられし時御籏奉行被仰附○
鹿野組ニ而功有依○慶長十年七
月死

清次　与右衛門　右近

東照宮○

台徳院殿御代奉仕○大坂両御陣供奉其
時羽佐田茂兵衛塚本八郎兵衛と一所ニ高
名ニ而従是首級をとる○年月不知鳥居
左京亮忠政ニ預ケ○正保四年六月
十日甲[illegible]にて死

清倫　伝織　後平松と改

鳥居左京亮忠政方ニ浪人（一云死去
死　子孫ハ鳥居ニ勤平松杢右衛門と云

清信　與右衛門　後吉田と改

子孫不詳

祐義　六左衛門

同姓杉本庄左衛門重勝方より来りて養子となる
神田御殿にて右出生に付御納戸〇同組頭〇
小石川御殿御蔵奉行（〇同年七月廿六日御小納戸）〇天和二年六月
十七日桐之間御番〇元禄二年十二月廿
三日米之下御小納戸に　御料二百俵宛給
当之時並之通下〇同三年五月

十五日花光山誉清道後藤之所化
御前より同五〇元禄十五年同八月十
四日死七十五歳牛込清源寺に葬

義清　六左衛門　養六郎　源之助

元禄二年六月十日御小性組〇同年十二月
養父〇其後十已年　同九月十四日
死六十一歳同寺

祐生　源之助
不知年月日中書院出仕○享保二年九月十日
死二十七歳同寺

祐教　孫四郎
二男惣領○享保同十四年十二月二日家督
○同十八年十二月九日死二十六歳同寺

清門　左源太
実義清二男
養子○享保十八年十二月廿七日家督
○同十九年十二月廿六日中書院出仕○
寛延二年五月廿七日病死之中書院○明
和三年正月二日致仕○天明三年二

月十八日死年　葬同寺

義宗　源蔵　喜三郎　帯刀

実ハ飯田喜千郎有清二男

宝暦九年七月七日聟養子○明和三年正月二日家督小普請○同四年正月廿四日家基上臈見習○同五年十二月十五日同上○同六年正月廿四日西丸小性組○同七年十月依願寵的上臈見習○安永八年正月十六日御本丸勤○天明元年五月廿六日西丸勤○同六年閏十月廿日御本丸勤○同七年十二月五日同組之既○同年十二月十八日布衣○同八年十月十八日御成之節弱場ニて龍村○寛政元年十月六日同所○同二年九月廿六日因幡上臈見○同年十月七日弱

場所御成之時騎射〇同七年二月廿日
小金原鹿狩之時騎射〇同八年十二月十日
養君附〇同十二年八月十四日病死四十七
歳

義理

大源七　秀五郎　孝四郎

天明七年十二月廿六日初見

常憲院殿御代

松平　高五百石

源姓

家紋　二引両　花菱　五七桐

観忠君四男松平刑部丞親英嫡孫
松平長三郎源乃入養子

隆欽

伊織　十助　主税　與十郎　長三郎

実戸田大炊頭忠利次男

養子〇天和二年七月十二日家督継之

合〇同二年十二月十八日徒目付〇同年
閏五月廿一日御小性組〇元禄八年六月
廿日御書院番組入〇同年十二月十八日
布衣〇宝永六年八月廿七日新番頭
〇同七年九月廿一日御小性組番頭加増
五百石〇同年十二月十八日従五位下〇享
保二年六月十五日死五十八葬江戸四
谷法蔵寺ニ葬

幸隆　田宮　金五郎

享保二年十月九日父か遺跡之内五百石
分知〇同二年二月十六日御小性組〇
同十二年十二月十五日御番役〇同十三
年十二月廿八日小十人頭〇同日光御社
参修奉行〇同年十二月廿一日布衣〇同
十四年五月廿日御小性組頭〇同十
九年五月廿日当組又左衛門紛擾
肥前国一揆付為使者被差遣書面
武蔵国上領人家同月五日帰今追放
出府数日上領人家江引取又左衛門

候者之以前ゟ上ゟ書画之取繕申付く
候ハ蔵書物之御用御機嫌之為 四谷勤く
四面立畳之候付於書籍修仕○元文
元年十月廿八日病死其子至鉄砲組○
同五年十二月廿三日死去年十九歳同所
葬

恒滑　田宮　金太郎

元文二年三月十九日初見○寛保元
年二月廿日大番組小普請○同二年

七月二日御書院番○延享二年十月
廿二日此上ゟ備後大的時服二領並廿二
金二枚○同五年正月十一日同断○宝
暦元年十二月満願御用相済之為時
廿八日時服二○同二年十二月十一日増秼
因格親房之為ニ付之和館之嘗清番
寺之忠○同二年右相済之○同五年
正月十二日御修理為勤時服二領金二
枚○同六年正月十二日同断○同年十二月
七日病死也享年四十五　上野寛永寺同所葬

戒杖○同七年正月十六日吹上ニ而
揚焔硝時服一同十八日金弐枚○同九年正月
十六日同断○同年十二月十六日去年
皆勤褒美金弐枚○同十年正月十一日吹
上ニ而揚焔硝○同十一年正月十一日同
断○同年正月十八日吹上ニ而的金弐
枚○同十二年正月十一日吹上ニ而揚焔硝
○同十三年正月十一日同断○同十四年
正月十一日同断○同年閏十二月十七日
吹上依射武大的上覧翌十八日時服一

○明和二年正月十一日吹上揚焔硝○
同年九月廿日流鏑馬之節見役申
三百疋被下之○同三年正月十六日吹上
揚焔硝之○同四年正月十一日同断
○同五年正月十一日同断○同六年
正月廿一日同断○同七年正月十六日同断
○同八年正月十一日同断○同月十六日
小十人格○同年四月二日日光御参詣御供
○同年十二月十八日布衣○安永二年
正月廿七日日光御門主法会御供○同七年

五月廿日西丸御目付○天明元年七月
廿六日西丸御勤○同四年三月廿四日於
殿中新番佐野善左衛門乱心ニ付而差扣
締方之儀心附不行届候思召御役
御免寄合○同年四月七日依之差扣
同年五月八日差扣御免○同七年
十一月十九日六拾七歳死同寺ニ葬
寛保三年十月八日吹上ニ而遠矢大的上覧
時服二ッ被下置候○宝暦十二年十二月廿
五日於中野御場所大的上覧及拾二
拝領○同十二年十二月二日於吹上三遠
挽物上覧及拾二千之後十二度

栄淹　四官　金太郎　兵庫　直統
明和八年三月廿五日初見○安永五年
十二月十九日西丸小姓組○同七年十月廿
一日本丸御勤　御小成之弓術被同廿
四日時服二○同八年正月十二日吹上
的弓場始時服二同十二日金弐枚○天明
二年正月十二日吹上同断○同四年正

九日父順澄御役御免ニ付御目通
享和同二年十一月廿八日享和寺〻免○同三年
正月十一日於御座之間□□□○同六年
正月十二日同新ニ○同七年同断○同
年十二月廿九日家督○同九年正月
十二日於御座之間□□□○寛政二年
正月十二日同断○同三年二正月十二日同断
○同四年二正月廿一日同断○同年十一月廿
二日西丸出勤○同年十二月十二日
若君御宮参御用同月十六日布衣○安

永七年十二月晦日於御座之間大納言様上覧御前ニ被
召出時服二ツ被下○明和二年四月廿二日
於御座之間遠乗ニ付二ツ被下御目見
上覧之上十人扶

隆禄　金太郎
実父平岡右衛門正興二男
寛政元年九月十九日御番入○同二
年十二月十六日於御座之間小納　上覧之上御目見
○同四年三月十五日初御目見

松平　　高四百四拾石余

源姓　　家紋　丸ノ内葵　又三ノ桐

徳川左京亮有親嫡男

親氏　　太郎左衛門尉　三河守

永徳元年本国上野国を出三州松平
郷ニ来ル其ノ時信ハ信盛男松平太郎左衛門
尉在原信重か家を継其男ニ委シク成
先徳ヲ村里を平治し松平を相続

之城ニ居ス應永二十年四月廿日逝
六十三歳松平ノ高月院ニ葬ル

三河守　左衛門尉

泰親

有親ノ次男ナリ上州ノ世良田ニ在テ三河松平
ニ移ル親氏逝去ノ後其家ヲ継ク親氏ノ
男信光信廣幼弱ナル故親氏及末期ニ泰
親ヲ以テ家督トス初ハ三河ノ国代ニテ後三河
守ヲ賜ル岩津ノ城ヲ攻テ是ヲ取ル信光ニ岩
津ノ城ヲ附ス居住松平ヲ信廣ニ譲リ後ニ永亨
九年九月廿四日逝去行年七十六歳
同所ニ葬ル

信光君

遠江守　竹若丸　三郎　太郎左衛門

信廣

三河守親氏ノ一男　信光君ノ兄也松平
ノ家督ヲ継泰親ノ旧地ヲ領ス松平ニ
住ス城ニ居ル始泰親君岩津ノ城ヲ攻取
給フニ依テ信光君ニ家督ヲ安祥ノ城ハ
ニ附ス
信光君即チ浪者益親君ノ家督ヲ

僕リ敵陣ヘ入首功有其年松平山ニ閑居
文明十三年十月八日死其年八十葬地
不詳

長勝　號若宮　左衛門

親忠君ニ奉仕延徳二年於井田野現役
ノ軍士ト合戦ノ時軍功ヲ励シ敵
ヲ討明應二年十月十二日又於井田野
三河挙母ヲ始伊保八草上野ノ御敵大
将ニ二千余人寄來ル其時長勝御供シテ

ヲ取リ戦功有シ時モ此戦場ニテ
討死ヲ遂ケ此節ノ合戦
親忠君御供勝利也長勝軍功ヲ賞シ
死後嫡子勝茂所領ヲ増シ下賜フ
其子ニ至ル持此軍役ヲ勤其年數葬地不知

勝茂　號若宮　左衛門　號後入道

親忠君　長親君　清康君ニ奉仕明
應年中ヨリ文亀永正ノ頃三河和
ノ戦場ニテ度々仕戦功有シ其所領地

康之介並去年多持一方之御軍役
相勤就中文禄元年九月承之三年
併後加勢是等之儀を蒙君仰儀
一 貴殿以来高名之数を遂首戦功
所々之儀御感ニ付天文二十年二月廿日
書之三河岩津之儀ニ付 於之合
戦之節是等以人数之以先手仰して
被も之以件源十郎信茂之言之敵方
三宅右衛門尉被木日向守と相戦
以信茂戦死猶茂も常ニ属と云敵外

就之小此戦
清康君御深敵也勝茂父子忠戦之由
忠人以猶茂手底ヲ属ニ以戦場ニ於令
六十余

信茂　源十郎
親忠君　清康君之二代ニ仕ふ天文二年
二月廿日岩津御合戦ニ於討死

信吉
年少ニ依　本多左近
父信茂戦死之後家督

清康君廣忠君之二代ニ仕へ御合戦ニ随従
仕〇天文十一年八月十日於小豆坂尾張織
田家之軍士と御合戦之節
廣忠君御下知と承り小林源之助林藤
五郎以下相従ひ粉骨之働仕候伝十郎
勝吉之儀ハ右戦場ニて討死仕四十歳

勝吉　　伝十郎
一信勝

廣忠君ニ奉仕〇天文十八年三月廿三日
右仕權現様へ御側頭衆ニ被召勤同年

岡崎之城へ御還入之節河紀伊守信兼
松平蔵人同右近一郎等ニ而在候小豆坂ニ仕〇
同十八年八月於三河小豆坂父信吉と共ニ
戦死

親長　　隼人佐　右馬允

父勝吉戦死ニ付家督〇
廣忠君ニ奉仕〇天文十八年中
東照宮御幼年ニ而駿府へ御越之節御供
駿府ニ而知行被減ニ付松平右近殿へ立居候処

此改於川て三河大給之城主某夜中
俄ニ松平ヘ乱入居候ニ付敵大ニ乱節
右之処為参長清御城中ニ在乱
家士も其防難成家屋焼亡累代之重
宝家伝等も多焼失之ニ付此恨ニ合
和睦ニ付其後弘治元年尾州鳴海ニ合
戦之節和泉守親宗之名小軍功を励
し城中ニ乗入此時落城也其後本戦
場傷死
東照宮三河御一統之節長清ニ勤仕○承祖

七年七月二十一日死

親信　宗十郎
永禄初年の頃江州和田伊賀守の旗下
ニ属し後ニ摂州高槻乃荒木山城守と合戦
之節討死

重長　又十郎
尾州長久手ノ合戦之節池田勝入同
紀伊守并森武蔵守手ニ属し働
旗本侍ニ而合戦之時討死○天正十二

年四月九日死

忠重　甚作　太郎左衛門

兄重長戦死後家督

東照宮ニ奉仕松平ニ属シ武城ニ居ス○

永禄二年七月廿八日三河苅谷ニ於テ戦

ニ討死ス嫡子萬親里奉仕雅楽松平

ニ仕ル小ニ竜居ス○慶長八年十月廿

八日死年廿一歳

尚栄　太郎左衛門　彦之助　入道晴昔

初メ父ニ従ヒ三河ニテ松平ニ仕居ス○天正年

中関東ニ御入国松平ニ従ヒ

御先祖旧領ノ旧地ニ付小田原攻後ハ庶子

ニ於テ仰付○慶長五年関東御陣

ニ於テ小田原中十二郎晴信ト共ニ小田原ニ仕

信晴ト戦死ス尚栄ニハ其後御旗本ニ勤

○慶長十八年於越前ニ仕ル

東照宮ヘ旧領ノ地ヲ賜ル松平ニ仕ス

候而可被仰付旨　上意被成○慶長十九年
大坂冬御陣之節
東照宮小姓奉公致シ上野介様御陣場
相勤御陣之砌松平下総守様付人ニ弐
百石被下置御加増ニ而三百石松平下総守
御附人ニ被仰付候処御出仕以御免被指置候事方於江上
御出仕以御蔵米頂戴仕候処其後年々
仕候処上納米仰付渡領地候ニ而御米
下ニ成下而三百石之内松平下総守御
之地ニ而給ニ候付而と限所地ニ而給
江御付被成候ニ付御代々相定候ニ而御座候
御役目被為召寄付候ニ付御免ニ
而毎歳御用ニ付此節ニ而ハ無之ニ御座候
御役御用以右之通御座候
東照宮上意之趣ニ而何事ニ付御座候為
年始之御礼申上　御目見○ニ心得ニ而
罷出候処ニ病気ニ而罷出候○取扱ニ
年三月廿四日病死八十四歳ニ而御座候
御葬
一

信晴 重三郎

濃州関ヶ原御合戦ニ於テ討死二十二歳

重和 太郎左衛門

初名久○太郎兵衛○初見久○寛永二年十二月
悴信和ヲ連テ東府ニ於テ父子共ニ拝謁○寛
文四年十一月十五日五十八歳死高月院
ニ葬

信正 主膳 太郎八

実ハ本木太左衛門重次五男

慶長二十年二月於駿府江戸
東照宮ヘ御目見於江戸台徳院殿○同年
五月大坂御陣之節江戸供同月七日御
合戦之節江戸ニテ家ヲ継不
相勤之別ニ被召出○元和二年五月廿
七日死悴無之領地被召上歳二十五
宋栄山妙昌寺ニ葬

信和　太郎左衛門　清次郎

承應二年正月父之宅ニ於テ生ル東府
初見○寛文四年六月加敷番○元禄
十六年十一月二日死六十四歳

和通　代太郎　八十郎

元禄二年正月十四日父之宅ニ於テ生ル東府初
見○同九年六月十一日死二十一歳高月
院ニ葬

親貞　太郎左衛門　長次郎　幸力

実ハ松平次郎左衛門信重

元禄九年八月十二日養子○同十二年
正月十日養父信和之宅ニ於テ東府初見○
同十六年十二月廿二日加敷番○享保十
年正月十八日死五十六歳松平ノ生塚
山ニ葬

尚淀　太郎左衛門　内匠

正徳四年十二月十九日父ニ従ヒ参府
初見○享保十一年二月一日家督○延
享四年十二月二日死四十九歳同所ニ
葬ル

親相　本郷大蔵　清次郎　第力
延享二年三月朔日父ニ従ヒ参府初見
○同四年十二月廿四日家督○同五年
三月八日死年二十同所ニ葬ル

信家　本郷大蔵　織之助　致仕　仙程
実ハ尚池二男
寛延元年六月八日養父家督（同年八月本郷大蔵没）○宝暦
七年三月十五日初見○寛政二年
十二月十日致仕

信言　本郷大蔵　隼人
安永十年二月十六日父ニ従ヒ参府
初見○寛政二年十二月十日家督

松平壱岐守家来　三河国之内　竹中某方ニ付候

私祖父永原八郎幸吉与申もの元来中

勢州八田与申所ニ罷有法性寺村与申所ニ鐵砲代官相務

源兵衛罷在候

東照宮様浜松御在城之砌　石川所々御

陣ニ被為入候時参去奉九月八日首数差出

沙汰候処被成御判同十日河渡辺被為

濃州被遣候以後向後八田被召出

其後永原之御同道被仰付

相勤申候処　段々被九之内ニ三之指者着

旗本由緒

東照宮様御清御出陣之節御鑓持仕候
仕ハ以名村之上和田村之者ニ而騎馬持相勤候
義御座候ニ而二騎射前
上様之為御沙汰ニ而有之候御内ニ而高
被仰付仕候 御先祖以来定役ニ仕以在義者
右之後子孫八田姓相用ひ高名之縁之者
國之旗本ニ而出張相上候以上

丑十月

武蔵国中郷右衛門
百姓
源四郎

私先祖去ル元亀元年
東照宮様御清御出陣之節多門後中
紫田左京同役也其後ニ而遠州濱松
御出入被為有世元亀天正之年中ニ於
御座候ニ付 御用ニ而御座
後小牧御出陣之役
若君様御入城之節右ニ而御附人
右ニ而後御前ニ而被仰付相勤
平岩丹庵宗
東照宮様御供仕候小山御陣ニ而御供仕候

三年長篠於陣中茂高名有之褒美ニ
令三枚頂戴、高名仕候甲斐大綾肥前守軍
後之右ハ討死之高名ニ付同国自方令二之
枚ニ頂戴、又者後掟府中河瀬縁ニ而右勤仕候
所々ニ而令住候
右荒増申上候以上

廿
十一月

右先祖中根大炊介
三河国渡海記
宮路村
豊之丞

覚　宇都宮有美弓馬之事

右之者依由緒有之候ハヽ中ニ於テ諸士同
様永禄九年　右之者此方ニ而右可仕也

永禄二年
四月廿日
御名
御書判

中根主十郎
清水万三郎
宇田与市郎

右永禄二年四月廿日御判御物頭衆組
根組ニ候処之者ハ御軍用金出候事以上

数多勤功ニ依之新知並ニ孔自通
仕ニ而己之緒者ニ至迄上ニ相求 仰付候
之而事ニ而シて八重字第刀ニ至迄只今
之ハ通り段 仰付相申候ニ依之
帯ニ至る之御判物仍而

清康様御判形状之写

夫依為国津之合戦之砌献方指村箭
依之忠節之段感心之事以旨子孫江
可申傳之通

六月十日　治郎三郎
御判

清水丹波殿

三河額田郡岩津居沢町
紋所九ニ梅之字
清水甚十郎

弓馬依高名之宛新知行及料段重々
自省之言上ニ付依之弓師幼入年
共重叙之宣以百連可被加罰之通

永禄六年
十二月廿日
御名
御判

御鉄炮戴而持仕候

一 右之外刀脇差なと之類を

所持不申候十文字鑓持申候

御名

高橋武太郎との

大原之内弓刀所持仕候　諸役免除仕候

御縁安置仕候　諸役免除仕候

武具等之儀一而持仕候

定

一 銭附金之事

一 金六百貫目也

右者知行為代百姓不論借附之割
増以利足を相續若為御役料ニ寄附任之
至沖之知行有之者不為由事
右之通仍如件

天正十八年五月十日

小栗又一右衛門尉

忠判

高橋若太夫殿

松平甲斐守様御領分
三州渥美郡畑村
数代相続
同人悴甲 高橋式太夫

私先祖高橋若太夫儀者三河国坂
村ニ罷在
観式相続境村ニ而為 入用後国坂村
代々而為移以去ル御世話仕候ゟ伝之候
右若太夫子孫永禄年中

檀那様 御判物頂戴仕今而補任仕候
右御由来ニ而者長之以前所持仕候
御判物写
血脈一通右之通射請式并右様子
忠節之儀者当国之追而後忠勤
専要ニ候也
永禄六年十二月廿八日 御名
御判
高橋若太夫との

右之通少も相違無之候以上

丑八月

三河国碧海郡〇〇村
百姓
〇〇栄次郎

口上之覚

此度以尋府南山中従之後書付
を以申上候 御尋南山開基雑谷俗姓
大永年中 長十年 高月寺ニ罷出入
幕下府同十九年 南国額田郡稲

熊村ニ住居仕申候 世号台頭房少人之
世台保氏代々俗姓とこ山号にしく大
原山と名付申 寺山寺号と法
光寺と号ニ申候 二世台蓮之宝南
國中之郷浄妙寺 申十四世頓誉法
方之宝寶幢院之孫寺供院誉
之息女東誉之後浄妙院相
分り申候 右宝幢院殿之
御八代様之内 信忠様之御息女
清康様之御妹君 宝幢院之御子

武州小浦増興也勝興と申者當修
院開基也右開基之息女出家法寿
寺十二代目雅台院と申候法名ハ
雅妙宮と申し寛文二年十五月十日卒
候也開前之由緒承伝候法在一代
之參り當不住并住持之儀も其
且又大永之御代之山号不相知候
申ハ上人祖父也大永之歟
東照宮様へ御住持何も御當代
存し申候以上

寅
正月

御領所
三州額田郡稲熊村
東本願寺末
大楽山法壽寺
八世
台寿

松平太郎左衛門家旧記

国立公文書館
National Archives of Japan

一　三河国加茂郡松平といふ所に松平太郎左衛門尉信
重といふ者あり重豪家は小さき富家にして
男子なく女子ばかり二人あり婿をもとめて名跡
妹をば海女といふ所の女として同国三河坂井乃
内酒井といふ所に嫁して坂井と酒井とは
おなじものなり此二儀有海女ものち家はあり
或時信重は友を集め連歌を催し席を設
けたりしに親氏旅人と成りて松平村に
来り信重の家に入りて此様を見て信重

やかてとゝめて旅人を式具行か聟となして男子一人
産す此子成長の後に酒井か祖となる　旅人その後
さまよひて松平郷内の村に至り給ふ　行末も
なし　しく康し　以今あらく身をよせ給ふ
ほとに具行も是を以て返留あらんとて
信重か娘を見んて旅人に以今これを見て
旅人にめとらせて御名を名字を譲りて信
日々のむつましくすこしもいとはし
とて名字を譲り給ふて信重かむすめの
男子誕生ありて不肖ながら家名を譲り
まします　頭ひとつやう河合氏有りて信重の
ひとり娘かつて嫁し　松平太郎左衛門尉親氏と
名乗り給ふ　御子泰親と聞こえし　其の子信
広つぎ給ふ　信光公は三男にして早世　二男は
信広は足助に帰り給ふ　さてしかして信光
公武勇の達人にして功績ありて松平宗
家をつぎ名をなして武勇を知られ給ふ
まして山中のことをはかりて武士
同国岩津村に城をきつき　河内の地をおさめ
安城は信広に譲りて岩津の城を居城となし給ふ

祥乃城ニ而一方ニ御坐候者ゟ侍子四拾二人
御対面

一 信広より代々松平ニ住シ戦ニ而も長勝ニ
集り代々信吉ニ至りてハ條目の御坐候諸白の
得在り御軍役相勤けり

一 親氏公より義家より十四代ノ後胤世良田
三河守と名く 有親親氏泰親浪々ニ而
方々漂泊し管領氏満威勢ハ以ニ而
上野世良田ニ而己と出立んに在所ニ入来り
奥州ヘ御もしれ其後三河ヘ御移りまして

三河ヘ御移り入猶ふしく御休息ありけれ

一 有親ハ信州浪合にて御逝去ありけれハ禅
世有りて三河ヘ御移りありしハ親氏泰親親子也
親氏公徳阿弥と称して入道して御舎弟泰親公
ともに松平ヘ御移りありて婿乃名字を
もつて御城のあるしと成りてかの郷有し家老
武人不能不行給ひ御申ニ事ても備へ
性ゑと思し落髪しく御住居ありしとか

一 親氏泰親親世良田にてくらし出家と思ふに
ゆかん夜深なる小御入住持乃形と成り遊行

御旗の下にて名付く家臣二人不能ハ門徒く
名付く

一 親氏三河国へ入せん門 坂井の家ニ寄宿
而有けし間苑かく男子一人出生徳若
此名付る事後酒井氏と称すハなり
しかるに其後わりくて後松平の家ニ相続
せしよりゆゑに酒井家とも世々家臣なり
かくて仕たりけれ

一 信光の内ニ清水有しハ 信光公より代
仕候謂有けるにより是ハ開山と称せし

一 家康公ましく岡崎の城ハ以前竹千代ナれ
ありて通しけれ 家康公より前 信光公と
七代の間なりけれ

一 秀忠公も遠江浜松にして御誕生ある
よりて其城を以て御謂清水にしける

一 座頭の内一檀ニありて此社ニ神龍の名
付く荒れあり此くして信盛熊野と称し
て年々ニ乗随ニ之ありけるに傳へある
家光とも少しく縁しく合浪ふ其所
も年ことに末々慈悲深く召拝ありと

造りと穂せられしも謂る古き人々にうけ
つたへきたりしとしは
一 六所明神ハ此事觀氏寺觀音別へ
きこしめされしかハ所〻祭祀おさめく
守護甚深なるゆへに崇りありて三河松平
何とかして奥州塩竈六所明神を正勅
請し申付文符と社家ハ附け奉り
是清ら合ハまして京都ニ而祈楽
消なしらぬハ祀られて
在京ありて觀音公ニ此代ハ是清ふらる而

此大寺村へ明神を正勅請し奉りぬ
又大内村の社を往古ハ伽藍寺建立之処
野火ありて其の時焼失ハ今ハ小社にて
残し焼失ハ後安祥ハ道閑様松平
一 叢之節氏神となり御尊敬ありし
頃之ハ再ひ御書付ヲ今ニ有之
一 家康公ハ祀清水に参り給ひ祈ありて
太閤ニ而慶陣之用意ニ大船をもちゐ
さらに代々ハ一時に思ひ此の様な
田中ニ至りてもほしく其紀代ハ

御取立被為下置候ニ付、此地ニ住居仕候
処ニ付其所ニ家を作り持来り候
之内々ニ而右之品とも奉守り候得共、今ニ終り候
御祈禱人

一 権現様之御意を右各ハ、此儀ハ従関東
御発向之御先手祖父中島重兵衛仕荻谷
御陣中ヘ御頂戴馬上ニ被成、其節も後々
被仰付、松平内記殿左仕候、松平内匠殿相成
上下三組も田中三郎兵衛押領被仰付渡し候
被成、尚当栄成人ニ後関東より下着

御ハ御鷹二百松平内匠殿相成仕り来候
一 松平内匠殿右城様ニ 信玄公岩津村被
仰付置候節、城廻へ被為住居ニて、城取り
被成、御意ニ付仕候 依之まて之大切
住立不申被伐り申候
一 葵之紋之事御家ニ而御用ニ付
仰ニ付、右者先祖之代盛河代々の紋ニ御弘
家之紋九曜之右紋被成下
権現様上意ニて右之通り村々来り候
以上

傳に云く葵の紋は京の上加茂の神く
勅使と神主の葵乃紋を掛る事しあり
献上にハ其名ありといふとかし候
しかるに貞観年中より御代々附
来ると候也
一 加茂の神乃勅使今の内蔵頭しるし葵乃
葉を家紋として付る事ありし
一 清康公大殿ハむかしより紋は葵の御紋
名をも御働の者と分るに付て御
持し候為花本州に名乗りて事ありけれ

許春書の 一 許容を縫師に仰付られ
けるに出雲の画工に高献して紋之
絵を書と葵を附られし後戦場の陣画
工に書遣ししたるゆへなり
一 水野は同姓なれ乃白木あり酒井は定所
小松に縁にて白木あり海女ハ家紋に用て
立り男子作らしめ世良田の親
氏と申す子にて海女と縁して家紋
かつる
傳に云く親氏は新田大炊介義重

ハ嫡流世良田三河守頼氏より教氏家
時満義政義親季より世良田左京亮
有親乃子に至るまて上州の世良田江田を退
きて相州藤沢の遊行寺に入世を忍ふ為
に髪を剃して時宗乃僧となり給ふ有
親ハ長阿弥と号し親氏ハ徳阿弥と
號して大浜に時宗称名寺に立寄て
休息してより松平郷の主信重乃館に
来る主人か聟となりて男子をうミ給ひて
徳阿弥ハ世良田に帰流ましまして

信重に後なし信重に子なくしてひとり
娘をもちたりしか婿とし終に家をゆつりけり
家をハ徳阿弥ハ還俗して名のり
かへて松平太郎左衛門親氏と改め家督
をつかれ親氏仁器有て近里隣村
をことことく帰伏しておよふ是も
かたその後ハ所乃旅人と林添に至
り薮田源吾なとゝ謂へる勇将
威を輝たもて

一 中山の庄乃城主麻生内蔵允を責て二重

家門記にも　親氏ハ夫より人に逢ふて請ひ
しれ意なり人数を催し勝利を得給ふ
其威風に依りて田口氏中根秦梨ノ党
其奥岩戸の天野柳井田ノ山内等を落
取りけり東ノ郡に於て都合十七人
併せて小名を中山にて拾七名と云ふ　是より
能く彼ノ前田向ノ領地にて城ノ築きて
松平ノ領を以て一円ニ治め親氏ハ更に世良
田ノ里を出給ふ氏神にして祠れり
祈りしは我古く出て身を安とする地を得て

勤行して八幡神を信仰して果して松平ノ
地に身を安んとす家にとりて其ノ
氏神を道寛明神と彼ノ世に寛かに浄
地とはしりて小社を建立して円福寺と
城を築く後社は今の城ノ北に当る戦
城へ行く城下ノ事と其ノ事を祈りて云ふ
家に移りて（今の宮口の小祠所祀なり）因て又彼の祠り
一宇を建立して菩提を家に勤む（今の高月院）
（信光之礼なり）親氏其の秩ち其をも知りて不仁成
る事なくして家を栄代を恭しく親て

議ありしかはからすも病死せし行高月院に葬
送りし芳樹院殿後ハ徳翁と號せし

一 松平太郎左衛門泰親家督をつきたまひし
泰親朝臣の若年より松平邑の他境に
軍發し陣に利を得ること多し中
にも岩津内膳か居城を責て城
くしぬるも統る處ハ城多くあて
継く備へ戰ひとしもつとも泰親の武略
に依て城中に利をしたるハ大給領に附る

被しこれ後とて城を修復して居城とし
たりし松平の家嫡を嫡子信廣に譲る
にかつるを以て泰親の威勢日に増し
細川仁木の村里を始として近邑所領
をも廣めらるゝ也其後岩崎城主西郷弾
正左衛門をも討んと欲して軍を毘瑞野へ
師を發し戦ひ大に勝利を得られ寛し
故に就山寺といふ寺の住僧和
睦を扱ひ泰親ハ男松平小次郎殿信光
に西郷弾正の娘を嫁せしめそのうへ

長沢乃城を攻落し 松平和泉守
信光より四男也 同時城下大平并作岡
田原京令守護として依之岩津長沢の
城を保し又伊京乃所々へ不意に出
まいられまなくして城中周章して程
貴ハ小窺く城残おゝし米田原京に
出人衆謂り加勢し小国小落行く恭
親功をとけ 名残利しく岩津乃城を
たもつ卒し給ふ道しく良祥院殿
秀岸祐金大居士と號し廟所岩津に

信光次男にて藥久
一 親氏云卒候ひて信光云初めとそ
あり□親氏乃舎弟泰親嫡男とも信
光成人乃のち家督を譲られ家に
泰親と二代とす

六所大明神造営御奉納之事
安祥道閲様 御書付之写
但此御書付御状ハ三河国大口村ニ有之寺
其頃領主松平佐七郎先祖隆盛人家

本知行方役人共方ヘ差上ケ候写
以附く
抑当社大作神者当国結城郡
村加護之所也就中松本一党之氏神
先祖崇敬之霊社也然則捧法施仰神徳
蒙擁護持成恙地依之家門繁昌而億代
之栄子孫無患而保松柏之齢故去大永
七年十二月中旬依源更当社不慮令回
禄自尓以降道宮未終而経年月就之
雖汁冥感有之若丈衆御一門之御合力
御一族之以助成若再興匠成且為先祖
謝徳且為子孫後栄之然寄随分之奉加令
遂造宮之致功給者源福貴安全而所
求満足給者也

百疋　道閑　御判
五百疋　祐泉　判

右道閑様ハ当雲寺殿観公母様之兄
以附ハ祐泉様之有之此方先祖越後当勝
義入道仕置名将兼祐泉様之事ハ越後令
祐泉と名常ハ後ニ附く

社頭由緒之儀ハ大永七丁亥十二月
以前加茂郡ニ有之天文年中ニ移候よし

六所大明神御宮棟札之写

聖主天中天　加陵頻伽聲　本地造立願人　皎月院　覚誉
哀愍衆生者　我等今敬禮　社頭造　願主　松平太郎左衛門尉源尚栄
元和三年
六月十八日　大工　石川九左衛門重正
細川忽左衛門某

誉式山　寶光寺
奉造栄三州加茂郡御先祖御氏神六所大明神
寛永拾五戊寅歳四月吉日
松平太郎左衛門尉源重和　判
同　高月院本誉尊太
大工　天野市郎右衛門重次
願人　福津傳右衛門

于時寛永二十二年
當國加茂郡外下山之郷六所大明神造宮
乙酉三月吉日
高月院　本誉　判
松平太郎左衛門尉重和判
深津傳右衛門判
大工　山田三郎九郎忠次判

右之通造立仕候元禄七年甲戌五月松平縫殿頭
家成代御目付破損造立仕候後本社再建之儀今ニ至
大破之儘ニ社殿造立仕候儀ニ御座候
元禄七年相殿造立之棟札右之通ニ御座候

元禄七甲戌歳五月十八日

奉再興六所大明神拝殿一宇

大檀那領主 松平縫殿頭

従五位下源朝臣乗成謹建立之判

一 元禄十七甲申年 私先祖松平右衛門佐信
和代右社之鳥居石ニ而建立同石之柱ニ大寺進
往並ニ

一 六所明神之儀 親氏公 泰親公 奥州
御在国之砌御祈願ニ而御取立有之御
崇敬之由有之候ニ付 松平ニ而
随分六所明神を御勧請被成候 大口村之社
領ニ御附被遊候儀ニ而先様より当方
にても御崇敬相継被遊候ニ付
左京亮親忠公御代ニ 右諸進之節大寺
村之明神を御移し 大口村之社ニ古ハ伽藍
御建立被遊野火ニ而焼失致し 只今ハ小
社ニ相成候 大永年中焼失之後
道閲様 松平一党之御氏神ニ御崇敬
被遊候 依之御書附大口村ニ有之
元禄之頃 松平縫殿頭殿社領相成
此様ニ申候

傳曰親氏公松平に来り給ふ初見給
栗に村猶昌の住僧山林に松の枝を求
めらるゝ其人の姿を松の樹の蔭にて
休居られけれは恠き行者の人にや為
しらんに若て云我は異人浅竜に大明
神也氏子ならん近隣に来りて住む
けりし有る也讓して治せを退て其國人を捐く
若為給へ住僧甚く不思に給ひ給
松平に来りて住給ふ
親氏公此御事なりとせし申傳欸

若宮にて峰か峯に新大明神と御勧請
ありしか後まて今此寺山に移され
けりと傳ふ

郷武城之事

但此城山之後一ヶ条に而古の但書記仕置
少狭し地之村古に寄人能三年滿地く
此地古村茂出居候と雖

一 親氏公の德年中に松平太郎左衛門
の家督を継させ給ひて館之高の山を
平らかにて城を築かせ給ひけるか

武城とも名付まて小居にありし初とも
うけ入るものから四手底くる成とあ
岩津は城とも號せしの武城も信
康は続き受る代々居城に後忠重
集々依て年々て　代天正十八年寛永へ
御国諸の後邑請く塚田中を領し
松平公を押領させられ剥猶く武
塚も衰後は忠重嫡子左那尾為尚業後
慶長八年に至ては松平公種依して望
乃時は武城に移えて其後　御代に静謐

りしては城地は及も及び平尾君は住居に依
しては武塚地もる林木繁く城山と称して
林は斧を入ることは様不叶へ事なるに祢
寛永に至迄は信貞（親）時代をも山林繁
茂しく古城の跡なら続き来りて寛永之三
庚年より同公にる月院の当塚山に
御滞出来て候いか前の往古
長親公安祥より立ちそら桃山を年に
りしも
御先祖様御廟所は陵に付する月院に

御供養料として近村ゟくを頂年々依
領地之内四貫文取立候御修復附之者年々貫文従
文之内ハ右城山并其外四寄附之銀子書
入住職方役儀右之段相續候ハ、漸勝ニ相立
出入不及ひ五ケ年因ゟく宝暦四年成
二月御裁許相済候而月院持山ニ相成候由
候きとも右大永年中道閑相四所ニ
相四貫文也申之候城山之中山茂出入相済
在番ニ付右様集人住居之仕候様之儀付
之城地迄以ち願ニ貫渡し可申ハ右之次

一 其段之者御急合ハ家来方御下知而もの
之内候處寺社奉行所長田周防守
御遠之節ニ相見候而月院持山之節ニ
極り申候ニ付ニ其以前代之御備仕申候城
山林之者勝候代荒し相入候之者不
況ニ而も一度御伺済相済候後ニ者相続而
営く相庶ハ右迄以後之も難く

一 六所大明神之事
觀音並松葉ニ而あり候う奉之様物 御宮料

一 塩竈之六所大明神を松平陸奥守宰相
中山より御遷宮御勧請被遊候事ニ御座候
山を芳樹山と号し森の異名を宮村と
名附申候 観心院御時分之儀と申伝候
御勧請之中本社の儀伊勢神代之事を
以古例小宮小社ニ不申上候

一 御産湯之井之事 古来申伝之候
之代々ニ而湧出候清泉御座候裏之山林ニ候
庭ニ御座候今之居屋舗丑寅之方ニ御座候

一 八幡之御社一宇 右之御井戸之上ニ御座候

是も観心院御勧請之遷宮ニ御座候哉当村
須賀権現と申候

一 古城跡之儀松平陸奥守中央ハ有之候山ニ御座候
東之方ハ山続キ三之方ハ谷切ニ而便ク要
害ニ候ハ成程立候場所ニ御座候例ニ不始
観心院様御親族御座候より以来代々居
城ニ而仕置御座候所天正之末より文禄之初迄
時代ニ而被御仕ニ而松並木相残り有之候処
去ル寛延三年八月より同月院中出入ニ而
庭ニ而御城之跡ハ成之寺社支配

門当へ浙江仕私出来不申候 右此節御寄撃
有之高月院へ御附被下候

一 御廟所之儀

親氏公御墓之儀者只今大松山高月院境
内之御墓所ニ而相違無御座候之旨存
右親氏泰親御両公之御儀由緒思召候所
中ニ而御座候由当所ニ御座候事ニ候由入候儀
有之候得共実ニ
御廟所者中ニ作成並ニ方丈之処ニ候
又輪形ニ 御石碑ニ而ハ御座候儀ニ無之候

古松乃一樹有之候処ニ此樹ハ伐取不申候ニ付
只今の古松ハ皆ニ古樹乃御廟所
之上ニ植候ニ相成候て何茂其後植
少当寺知之儀ニ付保申御治世之始ら
御代々様御吟味御座候当寺所
松平ニも不限
御廟古墳ハ他ニ無残而ニ為何も之地
命之事候ニ付而松平氏御寄附之
儀ニ付て当寺使之実ニ微力ニ而中ニ
大業を建立せられ候得共御事故

親氏公　泰親公御廟所ニ成候、何連ニ当
院ニ而も此両地ニ実事慥ニ有之候
信光公御以来御代々御位牌并御墓所も当南ニ
り候得共不相知候

一　当寺先祖代々拝領物ニ候哉并感状
等も所持不仕候様　親氏公以来相伝仕候
刀一腰　并後行平作ニ御座候
神君様御代以来刀一本　三州長清大道作
拝領宗尚代御具足　来迎院蔵一領
右大坂御陣ニ罷出仕御供仕候ニ付伝候

一　親氏公松平江御入被成候節者郷之沢
ニ之表ハ御時代并寺号無之候而有之候
信光公御代寺号を被附押被成候様
永平寺之草庵直ニ流寺ニ被遣候
右見候ハ松平家之祖越前守信広御参ニ御座候
之子越前守泰勝時代も右同様被見候

一　又其松山高月院四代ニ相渡候
親氏公当所松平へ為入間御参宮之
御頼依テ付之其菩提所ニ被仰定候大寛

立和尚ハ貞治元年中ゟ当月院ニ住職仕候

一　永和三丁巳年　五月廿五日入寂仕候由承元

甲戌年四月二十四日　観誉云御遷化被遊候

一　同院二代目浄誉開的　御導師被勤候由

右鏡誉元ト有之ヲ当寺ニ有之候ニ付永

二十年ニ而其ノ寄之元ト誤写ニ有之候而

然ルニ此院ハ相知不申候

一　又一説新田末流　御系図　康安元戊申年四月二十日ニ

逝去之旨諸之相知候得共設ニ伝ニ承候ゟ遺

一　又高僧山派勤院　應永十三丙戌年四月十日

ゟ御代ニ而ハ当家ハ是又文書ニ誤ト伝来ル雑

汁ニ候

一　恭親公　松平何々為　入道候　御遷様ニ被

故親氏公以後続ニ相成年月之経候　御

母公松安全院　御姉君と申当国回国ニ御入

色リ来迎　松平之邑へ御移り被遊候ニ

親氏公之為　御坊之御位牌ヲ残さ之候旨の

一ツ之庵室を構之御安置仕被遊候由ニ

其十二代目住持後之時宗ニ帰依候

之雑候

一 泰親公御代之事、親氏公御他界之
後、泰親公三十ヶ年之間御在位、信光公
御十二歳ゟ御廿四歳之年迄御幼稚
御代り為入、廿四御時三河額田郡岩津城へ
移り被成候、泰親公之御系図之儀、御家譜ニは
相見へ不申事ニ候、永享九年丁巳御齢
七十六九月廿二日御逝去之旨、御由緒書ニ相見へ候
永和二年丙辰九月廿二日、文安六年戊
辰九月之儀、御逝去之由一説有之候得共
右之法名様之内 泰親公ハ

一 親氏公之御実男之様ニも相見へ候得共、御舎
兄様之御様之家譜之表 親氏公御子
信光様之御座候付、御後見被成候由
一 信光公御幼稚ニ而 泰親公御後見被遊候様
御相続被遊候、右御幼稚之御法名
崇岳院殿大禅定尼之由申上候、御命日九月
廿八日 年号不相知候
一説ニ大浄院殿松壽大禅定尼之
由申上候、御命日八月、応永二十年辛巳四月廿七日
之由有之、信光公御母儀様之御法名とも

ト傳ニ者右衛門と申候得共松平太郎左衛門
尉信重娘ニ而　信廣ハ　信光公と異
母ニ而候故家督ニ式部殿泰親公ニ而候ハ

一　親氏公御時代松平と申所領地ニ御座候
郷之内九ヶ村額田郡之内五ヶ村ニ而有之候ハ
私家之祖信廣ニ譲り被置候御領地ニ而御座
郡之内九ヶ村ハ其後当ニ安城岡崎茂等人
依信吉ニ右加茂郡之内村々知行仕候
尤村名并領地ニ而候儀ハ相知不申候

一　松平郷之儀ハ　親氏公ニ而入婿ニ被成候儀

其後古康永年中之祖信盛浪々ニ而
三河国加茂郡ニ来り下山之内日合ニ
松平ニ入り右地を開き居住仕候由ニ而
婦子信重代ニ至り
親氏公御入ニ被成候所中根ニ御館と称
し候由ニ相聞申候
右此書附之内ニ有之二月太郎右衛門と
有之ハ切紙ニ而通り之写ニ御座候

御八代御年寿

觀應二辛卯上野國ニ御誕生　御幼名徳王丸
一 親氏公　御年六十二
御逝去應永二十癸巳歳四月二十日

貞治四乙巳ニ御誕生　御幼名龍明
一 泰親公　御年七十二
御逝去永享九丁巳歳九月廿四日

應永十一甲申松平ニ於テ御誕生　御幼名
一 信光公　竹千代君
御逝去長享二戊申歳七月廿二日　御年八十五

永享十乙未年御誕生　御幼名竹千代君
一 親忠公　御年六十二
御逝去明應九庚申年八月十日

文明六癸巳歳御誕生　御幼名竹千代君
一 長親公　御年九十七
御逝去天文十三甲辰歳八月廿二日

延徳二庚戌年御誕生　御幼名
一 信忠公　御年寿
御逝去享祿四辛卯歳七月廿七日

永正八辛未歳御誕生　御幼名
一 清康公　御年寿
御逝去天文四乙未歳　月　日

大永六丙戌年御誕生　御幼名
一 廣忠公　御年寿
御逝去天文十八己酉年　月　日

国立公文書館
National Archives of Japan

日本政府図書

右御代々様御治世之節 御触書并渡

右例ニ而高札所并戸々ニ本御用相立

申ニ而御座候

右之通ニ御座候ニ付今般

御尋ニ付御座候先祖書ゟ尚又代々書記

仕置申候相渡不残候ニ而写仕差上候得共古

西之内先祖書ハ大凡ニ而先祖書并家譜之書面

漏レ候分合不仕候得共も御座候分ハ通之書付

代々之覚書ニ而御座候ニ付破ニ而誤相分不申知ニ付

付候ニ付書写差上候且又年数立候ニ付右

相分り申候儀も御座候ハヾ又古キ覚書等ニ而

御座候後不相知候ハ此段奉申上候 以上

文化二乙丑歳閏八月

松平大膳大夫

内閣文庫

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan